

令和2年度病虫害発生予報第5号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

*予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

作物名	病虫害名	予想発生量	作物名	病虫害名	予想発生量
水 稲	葉いもち(普通期栽培)	並	ブドウ	べと病	やや少
	穂いもち(普通期栽培)	やや少	果樹の 共通害虫	カメムシ類	多
	紋枯病(早・短期栽培) (普通期栽培)	やや少		露地	べと病
	もみ枯細菌病	並	キュウリ	炭疽病	やや多
	セジロウンカ	やや少		褐斑病	やや多
	トビイロウンカ	やや多		うどんこ病	並
	ツマグロヨコバイ	やや少		斑点細菌病	やや少
	コブノメイガ (普通期栽培)	多		モザイク病	やや多
	斑点米カメムシ類	やや多		ミナミキイロアザミウマ	やや多
	ダイズ	ハスモンヨトウ	やや多	青ネギ	疫病
カンキツ	そうか病	並		軟腐病	やや多
	黒点病	やや少		ネギハモグリバエ	並
	ミカンハダニ	やや少	イチゴ	炭疽病	並
	ミカンサビダニ	やや多	(育苗床)	うどんこ病	やや少
	ミカンハモグリガ	並	露地キク	白さび病	並
モモ	せん孔細菌病	並	野菜、花 きの共通 害虫	アブラムシ類	並
	褐さび病	並		アザミウマ類	やや多
	ハダニ類	やや少		ハスモンヨトウ	やや多
	モモハモグリガ	並		シロイチモジヨトウ	やや多
	ナシヒメシンクイ	並		タバコガ類	やや少
カキ	炭疽病	やや少		ハダニ類	並
	うどんこ病	やや少		ハモグリバエ類	やや多
	カキノヘタムシガ	やや少		(トマトハモグリバエ、 マメハモグリバエ)	やや多
	フジヨナカイガラムシ	やや多			

令和2年度 病害虫発生予報 第5号（8月）

A. 水稻の病害虫

1. 葉いもち（普通期栽培）

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) BLASTAM（いもち病発生予察システム）による7月の感染好適日の出現頻度はやや多かった。(＋)

(3) 8月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。

対 策 (1) いもち病対象の箱施薬を行っていない圃場で発生を認めた場合や既発生圃場で病勢の進展を認めた場合は、早急に薬剤防除を行う。

(2) 箱施薬を行っている圃場において、上位2葉への進展を認めた場合は早急に薬剤防除を行う。

2. 穂いもち（普通期栽培）

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 8月の葉いもちの発生量は並と予想される。(±)

(2) 8月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。

対 策 止薬に病斑を認めた場合は出穂期に必ず薬剤防除を行う。

3. 紋枯病

予 想 発生量 : 早・短期栽培 : やや少

普通期栽培 : やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は早・短期栽培、普通期栽培ともにやや少なかった。(－)

(2) 8月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。

対 策 (1) 紋枯病対象の箱施薬または本田防除を行っていない圃場では、適期（普通期栽培では出穂25～15日前など）に薬剤防除を行う。

(2) 発生が多い圃場では、出穂期頃までに確認防除を実施する。

4. もみ枯細菌病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 普通期栽培の育苗期での発生量は平年並であった。(±)

(2) 8月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。

対 策 出穂期が高温で降雨を伴うと多発するので、このような天候が予想される場合は、出穂期に穂いもちを兼ねて薬剤散布を徹底する。

5. セジロウンカ

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は早・短期栽培、普通期栽培ともに平年並であった。(±)

(2) 綾歌郡綾川町の県予察灯での誘殺数は平年並であった。(±)

(3) 県予察圃場での発生量は平年並であった。(±)

対 策 (1) 箱施薬剤によっては、残効期間に違いがあるため、払い落とし調査を行

い、幼虫が10株当たり300頭を超えている圃場では防除する。

- (2) ヒメトビウンカの発生状況にも注意し、発生量に応じて本田での薬剤防除を行う。

6. トビイロウンカ

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は早・短期栽培で平年と同様に認めず(±)、普通期栽培で平年より多かった(+)
(2) 綾歌郡綾川町の県予察灯及び県予察圃場では、平年と同様に発生を認めなかった。(±)
(3) 8月の気象は気温が高い予報である。(+)

対 策 8月中下旬に普通期栽培では50株調査して1株当たり2～5頭、短期栽培では25株調査して10頭以上の成・幼虫を認めた圃場は防除する。

7. ツマグロヨコバイ

予 想 発生量 : **やや少**

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は早・短期栽培で平年より少なく(-)、普通期栽培で平年並であった(±)
(2) 綾歌郡綾川町の県予察灯での誘殺数はやや少なかった。(-)
(3) 県予察圃場での発生量はやや少なかった。(-)

対 策 出穂期以降の密度増加によってすす症状の現れる圃場もあるため、本田での薬剤防除を行う。

8. コブノメイガ(普通期栽培)

予 想 発生量 : **多**

根 拠 7月下旬の発生量は平年より多かった。(+)

- 対 策 (1) 成虫発生最盛期(7月末～8月初め)に周辺の圃場よりも葉色が濃かった圃場では産卵量が増える場合があるので注意する。
(2) 8月上旬の被害株率が20%以上の圃場では、若齢幼虫発生最盛期である8月5～25日頃に薬剤防除を行う。

9. 斑点米カメムシ類

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 7月下旬の早・短期栽培での発生量は平年並であった。(±)
(2) 防除員報告では、早・短期栽培で発生量の多い地区があった。(+)
(3) 県予察灯でのミナミアオカメムシの誘殺数は多かった。(+)
(4) 8月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か少ない(+)予報である。

対 策 (1) 出穂7～10日前までに畦畔等圃場周辺の除草を行う。また、休耕地はカメムシ類の繁殖場所になるので、耕起等によって雑草の少ない状態を保つ。
(2) 薬剤防除の時期は、液剤や粉剤等の場合は出穂期頃とその10～15日後である。また、粒剤の場合は7日程度早めて処理する。
(3) 防除効果を高めるために、地域一斉防除に努める。

B. ダイズの病害虫

1. ハスモンヨトウ

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 7月下旬の夏キュウリでは発生を認めず(-)、イチゴ育苗床では平年と同様発生を認めなかった(±)。

- (2) フェロモントラップでの誘殺数はやや多かった。(＋)
- (3) 8月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か少ない(＋) 予報である。

- 対 策
- (1) 被害葉は表皮だけを残して白色になっているので、これらを発見したら摘葉するとともに薬剤防除を行う。
 - (2) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1 cm以下の若齢幼虫期に防除を行う。
 - (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

C. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. そうか病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠
- (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 - (2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかったが、一部地域で発生がやや多かった。(＋)
 - (3) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)
- 対 策
- (1) 発病した夏梢、葉、果実は早めに切除し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。
 - (2) 樹勢を健全に保ち、防風対策を行う。

2. 黒点病

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠
- (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 - (2) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)
 - (3) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)
- 対 策
- (1) 伝染源である枯枝は切除し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。
 - (2) 薬剤散布は、前回の散布から1か月以内または累積降水量200～300mmを目安に行う。

3. ミカンハダニ

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠
- (1) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
 - (2) 8月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並か少ない(＋) 予報である。
- 対 策
- (1) 発生状況に注意し、1葉当たりの寄生雌虫数が0.5～1頭または寄生葉率が30～40%になれば薬剤防除を行う。
 - (2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

4. ミカンサビダニ

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠
- (1) 県予察圃場での7月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 - (2) 一般圃場での7月中旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 - (3) 8月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 過去に発生が多かった圃場では、8月上～中旬に薬剤防除を実施する。

5. ミカンハモグリガ

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)

対 策 夏芽の発生が多い圃場では、新梢伸長期に防除する。

－モ モー

1. せん孔細菌病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 8月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。

対 策 (1) 発病枝は伝染源となるので、見つけしだい除去し処分する。
(2) 病原菌は葉や果実の気孔、水孔等や傷口から侵入するので、風当たりが強い圃場では防風ネット等の防風対策を実施する。

2. 褐さび病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であったが、一部地域で発生がやや多かった。(+)
(3) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)

対 策 枝の病斑が最大の伝染源であるので、見つけしだい枝を切り取り、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。

3. ハダニ類

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
(3) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(＋)

対 策 (1) 発生が多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤の使用は年1回までとする。

4. モモハモグリガ

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月の発生量は平年並であった。(±)
(2) 県予察圃場フェロモントラップでの7月の誘殺は認めなかった。(－)
(3) 一般圃場での7月中旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

対 策 (1) 周辺で多発している場合や発生の多い園地では、定期的な薬剤防除を心がけ、収穫後にも薬剤防除を徹底する。
(2) 交信攪乱剤を設置している園地においても、発生に注意し、発生が増加し始めたら追加防除を実施する。

5. ナシヒメシンクイ

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の芯折れはやや多かった。(+)
(2) 県予察圃場フェロモントラップでの7月の誘殺数は平年並であった。(±)
(3) 一般圃場での7月中旬の芯折れの発生量は少なかった。(－)

対 策 収穫後も薬剤防除を実施する。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 8月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並か少ない(＋)予報である。

対 策 (1) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出し適切に処分する。特に前年多発生した圃場では注意する。
(2) 薬剤防除はかけむらのないよう丁寧に散布する。
(3) 連続した降雨や台風があると発病が急激に進む場合があるので、これらの天候が予想される場合は予防的に薬剤防除を実施する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. うどんこ病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
(3) 8月の気象は気温が高い予報である。(－)

対 策 (1) 発生量が多くなると防除効果が劣るので早めに薬剤防除を実施する。
(2) 落葉した葉はできるだけ早く処分する。

3. カキノヘタムシガ

予 想 発生時期 : やや早い

発生量 : やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での第1世代成虫の発生量は平年よりやや少なく推移している。(－)
(2) 県予察圃場での7月の発生量はやや少なかった。(－)
(3) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)

対 策 (1) 第1世代成虫最盛期の7～10日後(8月1～3日頃)までに防除していない圃場では、早急に薬剤防除を実施する。
(2) 防除を実施したにも関わらず、被害が続く場合には追加防除を実施する。

4. フジコナカイガラムシ

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 8月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 発生の多い圃場では8月の防除を徹底する。
(2) 果実とヘタの隙間に生息しているので、薬剤散布は丁寧に行う。特に、スピードスプレーヤー(SS)による防除では、かけむらができないように走行経路を見直すなど注意する。

ーブドゥー

1. ベと病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 8月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。

対 策 (1) 圃場の排水に努める。
(2) 発生の多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。
(3) 薬剤防除は降雨の前後に重点をおく。

－果樹の共通害虫－

1. カメムシ類

- 予 想 発生地域： 県下全域
発生量： **多**（令和2年5月22日付け注意報第2号発表）
- 根 拠 (1) 県予察圃場予察灯の7月の誘殺数は多かった。（＋）
(2) カキの一般圃場での7月中旬の発生量はやや多かった。（＋）
- 対 策 (1) 施設栽培の場合は、開放口をネット（4mm目合い）で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
(2) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
(3) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
(4) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
(5) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
(6) 防除薬剤は、地域の病虫害防除暦等を参考にする。
(7) 作物によって、登録のある薬剤が異なるので、使用にあたってはラベルをよく読んで、登録の有無や収穫前日数、使用回数等使用基準を遵守する。

D. 野菜、花きの病虫害

－露地キュウリ－

1. ベと病

- 予 想 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 8月の気象は気温が高く（－）、降水量が平年並か少ない（－）の予報である。
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、肥料切れに注意し、樹勢が衰えないように栽培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

- 予 想 発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。（＋）
(2) 防除員報告では、発生のやや多い地区があった。（＋）
(3) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。（－）
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐斑病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 防除員報告では、発生のやや多い地区があった。(+)
(3) 8月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か少ない(-) 予報である。

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は、炭疽病を対象に実施すれば本病にも効果がある。
(4) 薬剤防除は予防的に7~10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. うどんこ病

予 想 発生量 : 並

根 拠 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)

対 策 (1) 窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 薬剤防除は予防的に7~10日間隔で実施する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. 斑点細菌病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生は平年と同様に認めなかったが、一部地域で発生がやや多かった。(+)
(2) 8月の気象は気温が高く(-)、降水量が平年並か少ない(-) 予報である。

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに過繁茂にならないよう栽培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。

6. モザイク病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 7月下旬のアブラムシ類の発生量はやや多かった。(+)

対 策 (1) 収穫用具の消毒をする。
(2) 発病株は、早期に抜き取り、除去した株は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) アブラムシ類の防除を行う。

7. ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 8月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か少ない(+) 予報である。

対 策 (1) 施設栽培では、防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設

- するなどして、侵入防止対策を講じる。
- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 - (3) 促成、半促成栽培の発生ほ場では、栽培終了後施設を密閉して死滅させる。
 - (4) 本虫が媒介する黄化えそ病の発生地域では、本虫を対象に定植時に必ず粒剤または灌注処理し、定期的に薬剤防除を実施する。発病株を認めたら早急に地上部を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
 - (5) スピノシン系薬剤のうちスピノサドで感受性低下の事例が確認されているので注意する。
 - (6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－青ネギー－

1. 疫病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は多かった。(+)
 (2) 防除員報告では、発生のやや多い地区があった。(+)
 (3) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
 (2) 発生の多い圃場では菌密度が高くなっているのので、圃場をかえるか土壤消毒を実施する。
 (3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。
 (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 軟腐病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は多かった。(+)
 (2) 防除員報告では、発生のやや多い地区があった。(+)
 (3) 8月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。
- 対 策 (1) 発生の多い圃場では菌密度が高くなっているのので、圃場をかえるか土壤消毒を実施する。
 (2) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
 (3) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
 (4) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

3. ネギハモグリバエ

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は認めなかった。(－)
 (2) 8月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か少ない(+)予報である。
- 対 策 (1) 収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど適切に処分する。
 (2) 多発してからの防除は困難であるので、発生の兆しが見られたら早めに防除する。
 (3) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

－イチゴ(育苗床)－

1. 炭疽病

- 予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 育苗床での7月下旬の発生は認めなかった。(－)
 (2) 8月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発病株は見つけしだい除去し圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
 (2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返り等がないように注意する。
 (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
 (4) 予防剤を定期的に散布し、発生が見られたら治療効果のある薬剤を散布する。
 (5) QoI剤(ストロビルリン系剤)に対して耐性菌が確認されているので注意する。

2. うどんこ病

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 育苗床での7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 8月の気象は気温が高い予報である。(－)
- 対 策 (1) 発病葉は可能な限り除去するとともに、除去した発病葉は伝染源となるので、適正に処分する。
 (2) 本病は葉裏に発生しやすいので注意し、早期発見、早期防除に努める。
 (3) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
 (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－露地キク－

1. 白さび病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
 (2) 8月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。
- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
 (2) 薬剤防除は予防的に実施し、発生量が増加した場合はクレソキシムメチル等の治療剤を用いる。
 (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は夏キュウリではやや多く(＋)、イチゴ育苗床ではやや少なかった。(－)
 (2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数は、過去9か年の平均に比べやや少なかった。(－)
 (3) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(＋)
- 対 策 (1) 今後作付を行う場合は、防虫ネットで被覆したり、光反射資材を設置するなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。なお作物の種類に応じて農薬登録の適用に配慮する。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アザミウマ類

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は青ネギ、夏キュウリでは平年並であった。(±)
 (2) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(＋)
- 対 策 (1) 施設栽培では、防虫ネットを張ったり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) アスパラガスでは、圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ハスモンヨトウ

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の夏キュウリでは発生を認めず(－)、イチゴ育苗床では平年と同様発生を認めなかった(±)。
 (2) フェロモントラップでの誘殺数はやや多かった。(＋)
 (3) 8月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か少ない(＋)予報である。
- 対 策 (1) 若齢幼虫は集団で食害するため、被害葉は表皮だけを残して白色になっているので、本圃の果菜類等ではこれらを発見したら摘葉するとともに薬剤防除を行う。
 (2) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
 (3) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. シロイチモジヨトウ

- 予 想 対象作物 : 青ネギ、アスパラガス、キク、カーネーション等
 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の青ネギでの発生量は平年並であった。(±)
 (2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの誘殺数は、過去9か年の平均に比べ多かった。(＋)
 (3) 8月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か少ない(＋)の予報である。
- 対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、圃場をよく見回り若齢期に薬剤防除を行う。
 (4) ジアミド系薬剤に対して感受性低下の事例が確認されているので注意する。
 (5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. タバコガ類

- 予 想 発生量 : **やや少**
- 根 拠 (1) 7月下旬の夏キュウリの新芽での発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数はやや少なかった。(－)

(3) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの誘殺数は、タバコガは過去9か年の平均並（±）、オオタバコガは、過去9か年の平均に比べやや少なかった（-）。

(4) 8月の気象は気温が高く（+）、降水量が平年並か少ない（+）予報である。

対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 花蕾や生長点を食害するので被害が見えたら直ちに薬剤防除を行う。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

6. ハダニ類

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は夏キュウリでは平年並（±）、イチゴでは少なかった（-）。

(2) 8月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。（+）

対 策 (1) 施設栽培では、人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。

(4) 多発圃場では5～7日間隔で3回程度防除する。

(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

7. ハモグリバエ類（トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ）

予 想 対象作物 : キュウリ、トマト、ミニトマト、ナス、キク等

発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の夏キュウリでの発生量は平年並であった。（±）

(2) 8月の気象は気温が高い予報である。（+）

対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉や穫り残しの放置株は、次世代の発生源になるので圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

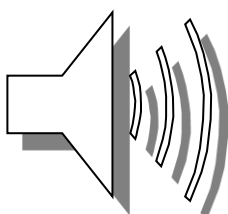
(4) 施設の発生圃場では、栽培終了後、後作まで何も植えず20日以上施設を密閉し、死滅させる。

(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jpjn.ne.jp/kagawa/>



6月～8月は、農薬危害防止運動期間です。

農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に使用できているか、チェックしましょう。